

## マンハイムとホルクハイマー

清 水 多 吉

一

以下に、やや批判的な紹介を試みようとするものは、マックス・ホルクハイマーのごく初期の論文をめぐる諸問題である。とりあげるホルクハイマーの論文は、一九三〇年、フランクフルト大学社会研究所の紀要“Archiv für die Geschichte des Sozialismus und der Arbeiterbewegung”にのせられたものであり、『一つの新しいイデオロギ―<sup>(1)</sup>概念か?』という挑戦的タイトルをもつ論文である。皮肉とも挑戦的ともうけとれるこの表題は、当時同じくフランクフルト大学にあって、前年の二九年に『イデオロギ―とユートピア』<sup>(2)</sup>を出し、当時の学会ならびに思想界にかなりの問題を投げかけたカール・マンハイムに対する揶揄の意味がこめられている。マンハイムに対するホルクハイマーの揶揄的批判(ただし、内容は決して揶揄的なものではない)を紹介する前に、当時の思想的情况を若干みておかなければなるまい。

まず、二〇年代のなかば以降、知識社会学の確立につとめてきたマンハイムは、「全体的・普遍的・評価的イデオ

「オギー概念」としての知識社会学の立場から、従来のイデオロギー概念の分析と批判とを数本の論文にわたって展開したのであった。これが一冊にまとめられ、マンハイムにとって主著とも言うべき『イデオロギーとユートピア』が世に出ることになる。マンハイムは、この主著の名声によってフランクフルト大学の社会学科に迎えられることになる。

ところで、マンハイムがこの主著で分析批判を加えたのは、従来のすべてのイデオロギー概念、あらゆるイデオロギー的態度に対してであったが、主要な関心はやはりマルクス主義のありように対してであった。マンハイムによれば、イデオロギー概念を用いて相手を批判する場合、その用いられ方によって、敵対者の主張の一部のみを、その内容に関して心理主義的地平で批判するという部分的イデオロギーと、敵対者の主張の全構造をその社会的基盤、つまり、その主張を支える集団的主体から批判する全体的イデオロギーとに分けられる。後者、つまり、全体的イデオロギー概念の使用を確立したのはマルクス主義であった。だが、マルクス主義が確立した全体的イデオロギー概念は、敵対者、即ち、ブルジョアジーのイデオロギー性の暴露にのみとどまっているかぎり、特殊的イデオロギーであるにすぎない。したがって、マルクス主義—プロレタリアートの体系もまたイデオロギーであることを認めるならば、イデオロギー概念は普遍的なもの、普遍的イデオロギー概念となる。このようなイデオロギー概念の批判的分析、ならびにより高次の段階への止揚は、単なるイデオロギー論的次元からは不可能であり、社会学的精神史としての知識社会学によって、はじめて可能になるというのである。

マンハイムの以上のような主張は、マルクス主義総体に対して向けられているのは勿論のことであるが、とりわけ、ルカーチの言う全体的性トータルタートの担い手としてのプロレタリアートを強調する立場に対して、鋭く対立しているのは言うまでもない。ルカーチは、第一次大戦から戦後革命にかけて、文字通り存在と意識との合一、主体と客体との再統合とい

う全体性<sup>トータルティ</sup>をめざして、プロレタリア革命にみずからを投入して行ったのであった。かつてルカーチのサロンのメンバーでもあったマンハイムは、先輩ルカーチの道をよそめにして、精神の独立に固執し、ルカーチ的マルクス主義にあくまでも一線をかくすることになったのである。マンハイムにとって、普遍的イデオロギーは知識社会学によるものであり、やがて、この知識社会学を担うべきトレーガーとして、知識人が強調されてくるようになる。

このようなマンハイムの論旨に対して、マルクス主義陣営から激しい非難の声があがったのは、言うまでもない。マルクス主義陣営からの非難を後ほど俯瞰してみることにして、まず、当面の批判者であるホルクハイマーの論旨をみてみよう。周知のごとく、ホルクハイマーは当時同じくフランクフルト大学にありながら、傍系である社会研究所によっており、非教条的なマルクス主義集団に属していた。ホルクハイマーの『一つの新しいイデオロギー概念か?』は、以上のような思想的情况のもとで書かれたものであり、いわゆる「フランクフルト学派」結成の直前のものであり、戦闘的マテリアリストとしての彼の面目が躍如としている論文である。

## (二)

ホルクハイマーは、まず、マンハイムの言う全体的イデオロギーという考え方に対して批判を加えようとする。マンハイムによれば、全体性というものは、部分的見方の包括的理論などと理解されるべきものではなく、「部分的見方を自己のうちに取り入れつつ、また同時に絶えず、それらを打破りながら、一步一步認識の本質的な過程のなかで、自己を拡大する全体への指向を意味するのであり、また目標として超時代的に妥当する結論をもつのではなくて、われわれにとって最大限可能な拡大を目ざすものだ」というのである。<sup>(3)</sup>ホルクハイマーに言わせると、マンハイムのこのような主張は、当然にも問題を形而上学的領域へとひきずりこむことになるという。<sup>(4)</sup>というのは、自己のなかでの

部分的見方を一つ一つ打ち破って行って、認識のより高い段階にたどりつくこと、つまり、歴史上に現われた世界観の運命を精神的に追求することによって、人間生成の本質にせまるといふのは、まさにディルタイの歴史哲学の発想とパラレルなものだからである。ホルクハイマーはディルタイの歴史哲学を以下のように要約している。<sup>(5)</sup>つまり彼の歴史哲学は、人間性の無限の内実を歴史上のあらゆる文化領域における行動様式や体系を追求することによってさぐる、というのであった。その際、人間の普遍的本質なるものは、歴史的文化体系のなかで現実化されてきたある「X」と規定されていた。このような概念的に規定不可能なある「X」を想定したディルタイは、しかし考えてみれば論理整合的であった。何故なら、彼は、この規定できないある「X」の基盤を、社会的な生活過程のなかにも求めよなどとはせず、あくまでも観念的なものとし、具体的な諸個人がそれぞれ己れ自身のなかに、可能態として担っているものと確信しただけのことだからである。以上のように、観念論としてなら、論理整合的なものを、社会学にもちこめばどうなるであろうか。一転してホルクハイマーのマンハイム批判は厳しくなる。

ホルクハイマーは、マンハイムのなかの観念性を厳しく追求して、次のように述べている。<sup>(6)</sup>このような観念的形而上学的なディルタイの思考性を受け入れた知識社会学者マンハイムは、ディルタイ以上に論旨が不明確になる。何故なら、社会学者マンハイムにとって、規定されない観念的なある「X」を想定するなどということは、社会学であるかぎり許されないはずだからである。それにも拘らず、マンハイムは知識社会学の目標を、「精神史に基づき、そしてまた常に新らたに吟味されるべき『状況報告に』<sup>(7)</sup>よって、つかの間の確実さになんじがらめにされている状態からますます人間を解放し、歴史の手で人間個有の本質の生成を解明することにおこうとする。ここで言われている「人間個有の本質」が、ディルタイの言うある規定しえない「X」にあたるのは言うまでもない。このような「人間個有の本質」を、マンハイムは、歴史上のそれぞれの時代や状況のなかでさぐり、しかも社会的基盤さえ求めようと

する。したがって、ホルクハイマーにとって、マンハイムはドイツ以上に論理不整合的なものとうつる。

ホルクハイマーは、マンハイムの観念性を更に追求する。それは、マンハイムのいう歴史についてである。<sup>(8)</sup>ホルクハイマーによると、マンハイムの述べている歴史もまた、極めてディルタイ的なものであり、いやむしろキリスト教神学にさえ近いものであるという。当のマンハイムは、観念的な「人間個有の本質」を説明すべき歴史について、次のように述べている。つまり、「人間の生成の劇」がくりひろげられる「舞台の書割り」でもある歴史は、「人間の生成の劇」の展開によつてはじめて、その意味をもちうるのだ、と。<sup>(9)</sup>極めて詩的なこの表現が言わんとするところは、こうである。即ち、人間の生成、人間の本質「X」が、歴史の上で展開されることによつて歴史はその意味をもちうる。ないし、人間の生成は歴史の本質と合致するように展開されてはじめて、その意味、その本質を顕在化するということである。ここで述べられている「人間個有の本質」「人間の生成の本質であるもの」などというものと、「歴史の本質」「歴史の意味」とは、相互規定的でありながら、同時に、相互に不分明であるのが分かるというものである。

いずれにしても、戦闘的マテリアリスト、ホルクハイマーはこのようなマンハイムの主張を、まさにあの恍惚主義者の言う特殊な世界体験、世界感情以外の何ものでもない、<sup>(10)</sup>いう。もっとも、ホルクハイマーに指摘されるまでもなく、そのことはマンハイム自身が認めているところでもある。例えば、人間の本質は何であるかということに関するマンハイムの主張は次の通りである。「われわれは究極的に何であるのか。これに対する唯一のふさわしい解答形式は、恍惚境のなかで自分と出会うことなのだ、ということ<sup>(11)</sup>を認めることにしよう。しかし、恍惚を説く者がいつも抛り所としているあの名づけがたきものは、じつはやはり必然的な仕方<sup>(11)</sup>で、歴史的、社会的なものとなんらかの関係をもたざるをえないのであり、それと運命を共にせざるをえないのである。」要するにマンハイムは、人間本質の理

解においても、歴史の本質ないし意味の理解においても、まったくディルタイ的観念論の域を出ないと断定されても、いたしかたない側面があったのである。これに反して、マテリアリストとしてのホルクハイマーにとって、「全体としての歴史は何か意味のあるものなどということは出来ない<sup>(12)</sup>」、「歴史は、それを計画的に定めようとする人間の意図的な意味から生れたものでないかぎり、いかなる意味ももたないものである<sup>(13)</sup>」。

(三)

『イデオロギーとユートピア』のなかで述べられる主張には、もう一つの特徴がある。それは、反対党派の個々の理論が「存在拘束的」であるのではなく、われわれのカテゴリ装置まで含めた意識全体がそもそも「存在拘束的」なのだ、という主張である<sup>(14)</sup>。これは、意識が社会的存在の反映を受けたものであるとするマルクス主義の立場に見、近いようにも見える。しかし、マンハイムの意図は、むしろ、マルクス主義がいうところの意識、あるいはプロレタリアートの意識までこの主張のもとにくりこみ、限定づけをしようとするにであったのである。このようなマンハイムの主張に対して、ホルクハイマーは次のように反論する。「彼(マンハイム)は、社会的状況とおよそ『理念型』の意味において考え出された世界観の全体性との間の、形式上対応しているものを求めている<sup>(15)</sup>」だけであると。確かに、歴史学者がよくやるように、歴史的諸事象を部分部分に分解して考察し、それらの部分の間に類似性を見出すというのは、有効な研究方法ではある。しかしこのような知識をもとにして、特定の時期、特定の社会的歴史的現実<sup>(16)</sup>に属するある精神的構造をつくりあげ、これとその社会的歴史的<sup>(16)</sup>存在とを結びつけるなどというやり方は、まさに「現実の人間の荒々しい権力闘争における精神上の出来事の上澄みをすくって考える<sup>(16)</sup>」やり方である。したがって、マンハイムの言う存在は、社会的歴史的なものというより、むしろヘーゲルのいうような無の観念と同一の存在概念

に近いものであり、このような存在と意識との結びつけ方も、まるで外的平列的であり、いうならば運命的な結びつけ方であるにすぎない、というのである。これがマンハイムの「存在拘束性」論に対するホルクハイマーの反論の要旨である。

更に、ホルクハイマーは、マンハイムの「存在拘束性」論における論理の循環論法をつく。その論旨はこうである。つまり、マンハイムの言う存在に拘束された諸イデオロギーの真偽を問うるのは、ただそれらのイデオロギーが時代にかなっているかどうかという判断からだけなされる。だが、時代にかなっているか、時代に遅れているかの判断は何によってなされるのであろうか。それは理論によってである。とすれば、この理論の正しさは何によって判断されるのであろうか。それは時代相応性によってである。このような論理の循環論法がマンハイムの「存在拘束性」論の背後にはある。例えば、マンハイムは時代に遅れた虚偽意識の例として次のようなものをあげている。つまり、「ある地主が、土地の経営はもうすでに資本主義的になっていくにもかかわらず、おのれの労働者に対する関係や、おのれ自身の役割を、あいも変わらず家父長的カテゴリーで解釈している場合」<sup>(17)</sup>などがそれであると。この地主のイデオロギーは時代にかなっていない。それはこの地主が資本主義的であるべき関係を中世的関係として把握しているからである。では、資本主義的関係のなかに中世的関係を普遍的なものとして持ちこむことは、何故に間違いないのであろうか。それは時代に遅れているからである……。ホルクハイマーは、マンハイムの論旨に以上のような論理的欠陥を認める。このような例においてなら、地主と農業労働者との現実認識不可能状態が、両者の形態にどのような影響を与えているのか、あるいはまた、両者のそのような関係がいかに古い思考様式の維持に寄与しているのか、といったことを追求するのが知識社会学の課題であるべきはずであるにも拘らず、マンハイムはそのような考察をおこなうことなく、もっぱら、イデオロギーの社会的機能を内的精神的考察に限定している。これがホルクハイマーの主たる

不満である。

以上要するに、マンハイムはマルクス主義用語とマルクス主義思考を、たくみに利用しながら、これらのある種の精神哲学へと変質させ、現実の諸矛盾を、諸理念の対立や諸世界観の対立といった観念論的な意味あいに変えてしまっている。ホルクハイマーの挑戦的論文の内容は、あらまし以上の通りである。

#### (四)

マンハイムの主張の背後に、歴史あるいは人間の本質の規定不可能というディルタイの影響があるということ——このことについてはマンハイム自身が認めていることでもある。だが、マンハイムの方法論が社会的状況を抜きにして、その上澄みとしての「理念型」的世界観を対比させて論じているにすぎない、というホルクハイマーの批判は、マンハイムの基本的的方法論批判であるとともに、この批判はそのままホルクハイマー自身の方法論にもはねかえってくるはずのものであった。マンハイム側から、ホルクハイマーへの再批判がなされていない以上、この論争を更に追求する手がかりはない。したがって、この論争の展開は、ホルクハイマー自身の積極的方法論提示をまたなければならぬだろう。何故なら、この『一つの新しいイデオロギー概念か?』は、あくまでもマンハイムの方法論がマルクス主義といかに似て非なるものであるかの批判にとどまっているものだからである。次に少しく、彼のマンハイム批判の基本姿勢を再吟味し、彼自身の積極的立論への展望をひらいてみたい。

「そもそもマルクスの方法の本質は、経済的発展によって条件づけられた階級諸関係から、社会的諸運動を统一的に解明することにあつたはずである。『全体性』の認識や、全体的かつ絶対的な真理などではなく、特定の社会状態の変革こそが、彼の学問の意図だったのである。したがって、その変革との関連において哲学もまた批判されるので

あつて、古い形而上学の代りに、新しい形而上学が定立されるのではない。<sup>(18)</sup>」

既に第一節で述べておいたごとく、マンハイムの全体的、普遍的イデオロギー概念は、ルカーチのいう全体性概念に鋭く対立するものであつた。しかし、にも拘らず両者に共通するものは、全体性概念（勿論、マンハイムにあっては、それより高次のものとしての普遍性概念があるにしてもであるが）である。この全体性概念を担う者がプロレタリアートであるにせよ、インテリゲンチヤであるにせよ、この概念自体が極めて観念的なものであるのは言うまでもない。マンハイムの全体的普遍的なるものの背後には、ディルタイ的観念性がひそんでいることは、ホルクハイマーの指摘する通りであつた。また、ルカーチの全体性概念についても、後のルカーチ主義者、ルカーチ解釈者がロマン主義的概念として拡張解釈してきたことによつてもわかる通り、その責め的一端はルカーチ自身が負うべきものでもあつた。ここに載せた『一つの新しいイデオロギー概念？』かの冒頭の一節にみるごとく、マテリアリストとしてのホルクハイマーにとつて、ルカーチ的であれ、マンハイム的であれ、いささかでも観念性をおびた『全体性』概念を容認できなかったのは、言うまでもない。

では、観念性をおびた『全体性』概念を否定して、ホルクハイマーは、歴史や人間を、どのようなマルクス主義をもつて位置づけしようとしたのであろうか。この問題を考えにあたっては、初期ホルクハイマーの時代的雰囲気と彼自身の他の論文にあたつてみる必要があるだろう。

周知のごとく、二〇年代のマルクス主義は、ソヴェト・マルクス主義と社民系マルクス主義の両正統オルトドクソニーによつて支配されていた。前者がレーニン、デボーリン、スターリンによつて代表される弁証法的唯物論の立場を主張するとするならば、後者は例えばベルンシュタインに代表される新カント主義、あるいはカウツキーに代表される社会ダーウイニズムなどをその依り所としていた。これらの両正統に対して、ルカーチ、コルシュのいわゆる西欧マルクス主義が

異端的に対置されることになる。この系譜は、どちらかといえば、初期マルクスを先どりすることによって、三〇年代以降の疎外論あるいは物象化論マルクス主義の先駆となる。ルカーチの『全体性』概念などは、まさしく、初期マルクスに存在していた「類的本質」の構造と論理とに、パラレルに並べて考えられるものであった。ところで、ルカーチやコルシュを有力な寄稿者としてかかえている当研究所の紀要アルキブに載せたホルクハイマーの論文は、このルカーチ、コルシュの系譜に対しても、ドラスティックに対決することを意味している。

「彼（ホルクハイマー）は、その名のもとにあらゆる手段が正当化される世界史的全体知のドグマを避け」<sup>(19)</sup>ようにした。ルカーチ、コルシュが「全体性」の担い手をプロレタリアートとし、その現実的具体的担い手に「党」を設定したこと、それ故にルカーチもコルシュも「全体性」を担うはずの全知全能の「党」をめぐる、不毛な闘いを展開しなければならなかったこと、これらのことを、ホルクハイマーは反省的にとらえる。とするなら、「党」から自由でありたいと思うならば、ルカーチ、コルシュの立論の基礎であった「世界史的全体知のドグマ」を否定せざるをえなかったのである。また、何がしかの観念性を含んだ歴史哲学の可能性について、ホルクハイマーは、ルカーチ、コルシュ以上に慎重であったがために、「彼（ホルクハイマー）は、二〇年代、マルクス主義的に新しい装いをこらして登場してきたヘーゲル哲学のサジェスチョンにも陥ることがなかった」<sup>(20)</sup>とも言われている。この意味においても、ホルクハイマーは徹底したマテリアリストであった。では、徹底したマテリアリストとして、マンハイムの観念性、ルカーチのドグマ性を批判するホルクハイマーは、己れみずからの方法論、ならびにそれに基づく歴史の再把握をおこなわないのであろうか。次に、『一つの新しいイデオロギー概念か？』に続く論文に、若干ふれてみよう。

## (五)

ホルクハイマーは、同じく三〇年『ブルジョア歴史哲学の端緒』<sup>(21)</sup>なる中編の論文を出版している。この論文は、いうならば、ルカーチ、マンハイムの方法論に対する批判を積極的な形で近代思想史にあてはめてみた試論とでも言うべきものである。とり扱われるテーマは「マキアベリーと心理学的歴史把握」「自然法とイデオロギー」「ユートピア」「ヴィコと神秘主義」などである。これだけの内容とテーマをみても、いかにホルクハイマーが、マンハイムの『イデオロギーとユートピア』に対抗しようとしていたかが、うかがえるというものである。

ところで、マンハイムの方法論が社会的状況を抜きにして、その上澄みとしての「理念型」的世界観を対比させていたにすぎない、というのがホルクハイマーの批判の一つの柱であった。この論文では、一つの世界観がいかに社会状況のなかで形成されるものであるかが論じられる。例えば、マキアベリーの「君主論」の世界観には、従来から、ある種の「理念型」的理解がある。つまり、「君主論」は、ルネッサンス的人間のダイナミックな能力の発露をすすめるもの、また、あらゆる結果を顧慮することなく、己れの情熱的関心から、政治闘争の法則性を追求しようとしたもの等々……といった理解がそれである。特に「生の哲学」の影響を受けたこのような「理念型」的理解に、ホルクハイマーは厳しく反対する。君主あるいは潜主の独裁を主張するマキアベリーの主張の背景には、いかに当時の新興ブルジョアジーの勢力がひかえていたか。つまり、君主あるいは潜主の独裁は、いかに貴族層を放逐しようとする新興ブルジョアジーの勢力拡張の要求に他ならなかったかが論じられる。マキアベリー的世界観は、とりも直さず新興ブルジョアジーの世界観であった、というのがホルクハイマーの主張である。以下、同様な方法論で、ホッブス、ユートピア主義者たち、ヴィコなどが論じられる。

「近代の書初の歴史哲学者マキアベリーは、抬頭するブルジョア社会の先駆者である」<sup>(22)</sup>といった理解が正しいかどうかは別として、この論文でのホルクハイマーの方法論は、むしろオーソドックスな史的唯物論の立場に近いところに立っているというべきであろう。ただ、歴史を動かす社会的経済的動因の強調とともに、人間の社会的な生活過程（合理的なものも、非合理的なものも）を重視する点に、マルクスによってはまだ定式化されていなかった視角がほのみにえている。シュミットは、この視角を特に強調して、ホルクハイマーにおける反形而上学的かつニヒリスティックな帰結を予測している。<sup>(23)</sup> 事実シュミットの指摘する通り、この側面はホルクハイマー自身のなかで、やがて大きくふくれあがってくることになる。しかしそれは、四〇年代後半をまたねばならない。それはともあれ、マンハイムの方法論に対するホルクハイマーの方法論提示は、この中編論文で一応はたされたことになる。

ホルクハイマーの方法論提示によって示された近代思想史へのアプローチは、やがて、フランクフルト学派（この中編論文を出版した翌三一年、ホルクハイマーは研究所々長になり、それ以後いわゆるフランクフルト学派を結成することになる）に強い刺激を与え、多くの研究者たちによって近代思想史の様々な試みがなされることになる。例えば、フランツ・ボルケナウの『封建的世界像から市民的世界像への移行』（一九三二年）も、このような気運のなかで出版されたものであり、その草稿にもあたる断片「機械的世界像の社会学のために」は、研究所機関誌 *Zeitschrift für Sozialforschung* に発表されたものである。このボルケナウの論作をめぐって、ヘンリック・グロスマンを中心として論争がくりひろげられたことは、既に周知のことであろう。いずれ、稿を改めて、この一連の論争を紹介してみたいと思っている。

以上、三〇年というホルクハイマーにとっては、ごく初期の論文をとりあげることによって、ホルクハイマーをめぐる思想史的状况を見てきた。最後に、同じくフランクフルト学派の他の人物のマンハイム批判を若干、補足的につ

け加えておきたい。

ホルクハイマーの論文より一足早く、やがてフランクフルト学派の有力な一員となるH・マルクーゼが、マンハイム批判の論文を発表していた。『社会学的方法の真理問題のために』（一九二九年）がそれである。その批判の要旨は、やはりマンハイムの「存在拘束性」論についてであった。一見マルクス主義的なこの論が、その存在観をあまりにも固定的なものとし、歴史のなかには己れみずからを乗りこえて行く「志向的要素」を見落していることを、マルクーゼは鋭く批判する。とはいっても、マルクーゼの批判自体がマルクス主義的というわけではない。この時期マルクーゼは、マルクス主義とハイデッカーあるいは生の哲学との間を動揺しており、二九年の論文自体にもそれがほの見える。

同じくフランクフルト学派でも、最若年に属するアドルノの批判『知識社会学の意識』（一九三七年）も、やはりマンハイムの分類的な形式主義に対する批判を骨子としていた。ホルクハイマー以上に弁証法論理に固執するアドルノは、概念形成過程における現実の運動傾向を重視し、概念自体の実用思想的合目的設定をきびしく避ける。マンハイムの方法論は、一見イデオロギー批判の形をとりながら、あくまでもその根底に、諸概念の実用的合目的設定を考えているために、真のイデオロギー批判たりえず、ましてや社会批判たりえてもいない、というのである。

いずれにしても、マンハイムに対するホルクハイマーを中心とするフランクフルト学派の批判は、一方交通的なものではあったが、フランクフルト学派の思想形成には重要な論争であったことに間違いない。そのみならず、この論争は、第一次大戦後のブロッホ、ルカーチによる近代思想史の把握に関する方法的問題提起以来、三〇年代マンハイム対フランクフルト学派を含めたマルクス主義者の論争を経て、第二次大戦後再度、ルカーチ、ブロッホ、フランクフルト学派を中心として展開された近代思想史方法論をめぐる、長い論争史の重要な一里程であったのである。

- (1) Archiv für die Geschichte des Sozialismus und der Arbeiterbewegung, von Carl Grünberg, Leipzig 1930 "Ein neuer Ideologiebegriff?" von Max Horkheimer S. 33 ff.
- (2) Karl Mannheim, "Ideologie und Utopie" Verlag von Friedrich Cohen in Bonn 1929, この主張が、この初版からこの本への主張が、この初版からこの本への
- (3) *ibid.*, 63.
- (4) Ein neuer Ideologiebegriff? S.39.
- (5) *ibid.*, S.40.
- (6) *ibid.*, S.40~41.
- (7) *ibid.*, S.38.
- (8) *ibid.*, S.42.
- (9) Ideologie und Utopie S.41.
- (10) Ein neuer Ideologiebegriff? S.42.
- (11) Ideologie und Utopie S.48.
- (12) Ein neuer Ideologiebegriff? S.44.
- (13) *ibid.*, S.45.
- (14) Ideologie und Utopie S.33.
- (15) Ein neuer Ideologiebegriff? S.49.
- (16) *ibid.*, S.51.
- (17) *ibid.*, S.34.
- (18) *ibid.*, S.33.
- (19) Zeitschrift für Sozialforschung この本は Alfred Schmidt S.10. の解説。
- (20) *ibid.*, 10.
- (21) M.Horkheimer "Anfänge der bürgerlichen Geschichtsphilosophie" Kohlhammer, 1930. 使用書はそのリプリント
- (22)

版。

(22) *ibid.*, S.18.

(23) *Zeitschrift* のリプリント版 S.11.

補註、時間的予猶をえず、フランクフルト学派の他の人物について十分な論及をおこなえなかった。またの機会をまちたい。

なお、マンハイムとフランクフルト学派との人間関係については、本学の新明正道教授がちょうど、この時期フランクフルト大学におられたので、後刻新明教授からのご教示をえて述べてみたい。『一つの新しいイデオロギー概念か?』を含めて、初期ホルクハイマーの論文ならびにそれらに関するコメントは、まとめて、七四年、紀伊国屋書店から出版される拙著のなかに入れられる予定である。